

まえがき

わが国は、国土の68.2%が森林に覆われています。これは先進国中、フィンランドに次いで2番目の高率です。私たちの身の回りには、ごく当たり前のように森林があり、私たちの生活は木に囲まれています。日本は森林国なのです。

身近に森林がふんだんにあることが当然のように思われがちですが、外国に行くと、日本が特に森林に恵まれた国であることを強く意識します。この20年間、私は中央アジア、西アジア、そして北アフリカと、いろいろな国で調査してきました。帰りの飛行機が日本上空にさしかかると、列島を覆い尽くした豊かな緑が目にし、そのたびに感激します。その経験から、改めて日本が森林に恵まれた国であることを実感しました。しかしそのわりに、日本人は森林のことや樹木のことを知りません。あなたの県では県土面積の何パーセントを森林が占めているか知っていますか？ 木の名前をいくつ知っていますか？

森林学は、森林を対象とした幅広い学問分野です。社会学や経済学から生物学や工学まで、多様な領域を含んでいます。昔の「林学」が林業のため、木材生産のための学問であったのに対し、森林学はもっと幅広く、森林がらみだったら何でもありの科学です。環境保全も、山村の民俗も、芸術も、文学までもが範疇に入ります。1970年以降、国民の森林に対する要求が、木材生産から環境保全に変化したことが、林学から森林学へ変わった大きな要因でしょう。学会も日本林学会から日本森林学会へと名称変更しました。

近年の社会風潮の中に、特に何でも「エコ」をつけて環境問題に配慮するような傾向があり、また、住みにくいストレスの大きい現代社会もあって、森林はこの世の救世主のような扱いを受けています。森林が炭素を固定し地球温暖化防止に大きく貢献していること、あるいは森林浴が現代人のストレスを大いに癒してくれることなど、森林の効用が多くの人々の知るところとなりました。一方で、山林労働者が急速に高齢化し、減少の一途をたどっていることなど、問題も多く抱えています。

本書は筑波大学で開講している総合科目「森林」の講義録をもとに新たに書き起こした一般教養の教科書であると同時に、広く一般に向けた教養書をも目指し

ています。この授業の担当者、すなわち本書の執筆者は多様な分野の10名です。林学の専門家は3名、土壌学や地球科学など周辺分野の専門家が5名、ほかの2名は国際政治学者と芸術家です。それぞれが森林に興味をもち、森林を愛しています。このユニークな執筆陣は、本書が類書とは異なる際だった特徴をもっているゆえんです。森林に関するこれまでの知識を確認しつつ、まったく新しい観点から森林を見直してください。

本書を読んだ森林国の住人が、身の回りの森林を見つめ直し、遙かなる森林に思いをはせていただけるなら、これに勝る喜びはありません。

2010年春

調査で訪れた全国の森林を思い出しつつ
執筆者を代表して 中村 徹